

ワーズワースの一断面

山 田 修 治*

A Phase of William Wordsworth

Shuji YAMADA

(Received April 30, 1980)

the creed of humanism, that belief in the natural dignity of man, of which Wordsworth is perhaps the supreme exponent among the world's great poets.¹⁾

ヒューマニズムに対する信条、人間の生れながらの尊厳に対する信仰、そうしたものに関してワーズワースはおそらく世界の大詩人達の中でも、卓抜した最高の代表者である。

I

ワーズワースは自分自身が育んできた人間への愛を讃歌として表現したいという胎動を「序曲」(“The Prelude”)の中で

How oft high service is perform'd within,
When all the external man is rude in shew,
Not like a temple rich with pomp and gold
But a mere mountain-Chapel such as shields
Its simple worshippers from sun and shower.
Of these, said I, shall be my Song; of these,
If future years mature me for the task,
Will I record the praises, making Verse
Deal boldly with substantial things, in truth
And sanctity of passion, speak of these
That justice may be done, obeisance paid
Where it is due: thus haply shall I teach,
Inspire, through unadulterated ears
Pour rapture, tenderness, and hope,²⁾

人間の外面が、どれほどその見せかけでは粗野であっても、
そのところの中では、どれほどしばしば、敬虔な祈りが

なされていることだろうか。それは、黄金で華麗に飾りたてられた寺院などとは似ても似つかず、日ざしや驟雨などから質朴な信徒をしっかりと守ってくれる、飾らない山中の教会に似ている。
かようなことを、将来の私の詩の主題にしたいと考えた。
もし将来、こうした課題にふさわしく、成熟できるなら、
私はそうした讃歌を書きしるし、韻文に仕立てあげて、
大胆に実質的な事柄を扱い、真実と聖なる情熱とにかけ、
かならずや正義が実践され、十分の敬意が、
しかるべき場合に払われるようにと願って、
そうしたことについて語りたいのだ。そして出来ることなら、
教え、鼓吹し、不純なもののない純真な耳を通して注ぎこみたいのだ、歓喜とやさしさと希望とを。³⁾

と格調を込めてうたい、さらに言葉を選び、“my theme / No other than the very heart of man”⁴⁾ (自分の主題は人間の心以外の何物でもない)と断言している。そして「言葉が巧みで、教養のある階級の人々との交際もうまくやってゆけるような人達、雄弁な弁舌をふるっているときに、もっている力量がもっともよく発揮され、一番もてはやされているときに、一番調子のよいような人達、そうした人達には、簡単にはききとれそうにもない事柄を、語ってゆくことこそ、私の誇り」⁵⁾であり、さらに「深い瞑想に適するようにつくられ、引込み思案で、言葉のやりとりには不慣れな人達、魂はその胸のうち深くに秘められていて、そうした親しい交わりの時にその魂が呼び出されてくるような、人当りの優しい人達、

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences - Foreign Languages)

そうした人たちの語る言葉は、天上のことばにもふさわしく、力と思想と形象と、落ち着いたよろこびにあふれ、しかもその一語一語は、彼らの魂のほんの補助役にすぎないのだ¹⁰⁾と付け加えている。

II

「序曲」の Book VIII は “Retrospect—Love of Nature Leading to Love of Mankind” (「回顧—自然への愛から人間愛へ」) と subtitle がつけられ、ワーズワースがどのようにして人間愛に目覚め、それを培ってきたかが、回顧して語られている。

ワーズワースは自然の中であって, “I already had been taught to love/My Fellow-beings, to such habits train’d/Among the woods and mountains,”⁷⁾ (すでに私は自分と同じ人間同志を愛することを教えられていた。森や山のなかにも、私は、そのように習性をもつように鍛えあげられていた。)と人間とのかかわりの糸口を切り出してくれる。そして自然に語りかけるようにして

’Twas thy power
That rais’d the first complacency in me,
And noticeable kindness of heart,
Love human to the Creature in himself
As he appear’d, a stranger in my path,
Before my eyes a Brother of this world;
Thus first didst with those motions of delight
Inspire me.⁸⁾

じつに、そなたの
ちからによるのだ、私のところに、初めて他人に対
する愛想のよさや、
とりわけ著しい親切さ、それに、本来ならば、路傍
の
縁もゆかりもないような動物までも、じっと目の前
において
眺めれば、この世の兄弟のように思われてくるもの
だが、
そうした動物たちに対する、人間的愛をよびおし
てくれたのは。
そのようなものを、そなたが初めて、数々の歓びの
仕草とともに、
私に吹き込んでくれたのだ。

と言葉を継ぐ。このことはワーズワースにとって他者への愛も、自然と切り離してはありえなかったということ
を教えてくれる。“Love and admiration for Nature
prepare the way for love and admiration of
Man.”⁹⁾

自然が「数々の歓びの仕草とともに、私に吹き込んでくれた」もののうちで、欠かすことのできない一つの例として、I rememberで始まり、まだほんの子供だった頃、ふとした機会で家から遠くへ迷い出してしまった時、「私は、とある狭いながらも奥深い谷間のなかに、足を進めた。と、私の頭上高く、銀色の霧を押しわけ、ぬうっと、見よノ犬をつれた羊飼いが姿を現わす。」¹⁰⁾との叙述につづいて、

With delight
As bland almost, one Evening I beheld,
And at as early age (the spectacle
Is common, but by me was then first seen)
A Shepherd in the bottom of a Vale
Towards the centre standing,¹¹⁾

さわやかな、といってもよいような
ところたのしきを感じながら、私は、その日の夕刻、
しかも、年令にしてそれほど若い時期に (見たもの
は
平凡であっても、私にとっては、その時が初めてだ
ったのだが)
谷間の奥の、ほぼ中央に突立っている、
一人の羊飼いを見つめていた。

と羊飼いとの出会いが語られる。あたかも自然の一部であるかのような羊飼いとの出会いであった。

この出会いが後に、さらに意味を増すのは、詩人にとって最初の人間愛の体験は、平和で、心地よく、のんびりと日を過ごすことがその仕事のすべてではなく、「あの始末におえないほど激しい雪や流れ、また昔、私があの寂しいところに、連れもなく、いつも独りでいたときに、あれほどもの悲しそうに吹きまくっていた、あの恐ろしくなるような風よ。じつに、そうしたところで、冬中、嵐に仕えている」¹²⁾のもその仕事の大切な部分である、羊飼いにに対してであったと打ち明けられる時である。

My first human love,
As hath been mention’d, did incline to those
Whose occupations and concerns were most
Illustrated by Nature and adorn’d,
And Shepherds were the men who pleas’d me
first.¹³⁾

私の最初の
人間的愛を体験したのは、さきにも記したように、
その仕事もその関心も、大自然によってもっとも気
高いものにされ、
美しくひきたてられている人達に対してであり、
羊飼いきそ、私をよろこばせてくれた最初の人間で
あった。

それは、詩人自身によってすぐあとに続く詩行で説明されているように、Arcadian Fastnesses (アルカディアの城砦) の中で、Virgil によって代表される ancient Poet 達が歌ったような、牧歌的な生活を楽しんだ人達でもなく、Shakespeare が the Wood of Arden の中で描き出した、甘美で清純で牧歌的な喜劇に登場したような、そういう人物達でもなかった。また祭りの日の Queen や King になって、共々舞踏にうち興じるような人達でもなかった。さらに言えば Spenser が、例えば “The Shepherdes Calender” の中でうたったような、華やかで、明るく、のどかな人達でもなかった。¹⁴⁾ というのは、

the rural custom
And manners which it was my chance to see
In childhood were severe and unadorn'd,
The unluxuriant produce of a life
Intent on little but substantial needs,¹⁵⁾

私が

少年時代に、たまたま見る機会のあった田園の風俗や習慣は、もっときびしく、まったく飾り立てなどなく、ごく現実的な必要以外には、ほとんど何一つかまけてはいられないような、きりつめた生活からにじみ出て、およそ贅沢などとは縁遠いものだった。

からである。

少年時代に、折にふれて、こうした環境に身を置き、人間に対して好奇に満ちた眼差しを向けることになった詩人には、“images of danger and distress,/And suffering, these took deepest hold of me,/Man suffering among awful Powers, and Forms;”¹⁶⁾ (危険、悲しみ、または苦しみといったイメージ、恐るべき力と形象とにかこまれて、苦悩する人間、そうしたものが、もっとも強烈に私をとらえた) としてもごく自然なことであっただろう。まさに現実的な生活をしている、厳しきや、貧しさに立ち向っている人達が、人間のあるべき姿として詩人の中に定着しはじめたのである。だから

A rambling Schoolboy, thus
Have I beheld him, without knowing why
Have felt his presence in his own domain,
As of a Lord and Master; or a Power
Or Genius, under Nature, under God,
Presiding; and severest solitude
Seem'd more commanding oft when he was
there,¹⁷⁾

ぶらぶらしていた小学生の頃、私がそうした羊飼いをみつめたとき、その理由はわからなかったけれども、自分の領土にいる彼の存在に、なにか王侯のような、支配者のようなものを感じたのだ。あるいは、世界を統轄したもう大自然について、神について、一種の神性、守り神のような感じを受けたのだ。どんなに厳しい孤独感も、彼がそこに居ることによって、しばしば、さらにひととき威厳を増してくるのだった。

羊飼いをみつめることによって、はっきりと人間への意識を培養しはじめた少年の日の詩人は、その後の詩行の中で、「夕陽の深い輝きを浴びて、拝みたくなるような美しさだった」羊飼いや、「孤高で、崇高なものとして」「シャルトルーズ¹⁸⁾のとある尖った岩山のうえに、礼拝の対象としてすえられた十字架のように」目に映った羊飼いを通して、やがて、人間に対し

Thus was Man
Ennobled outwardly before mine eyes,
And thus my heart at first was introduc'd
To an unconscious love and reverence
Of human Nature; hence the human form
To me was like an index of delight,
Of grace and honour, power and worthiness.¹⁹⁾

こうして、人間の姿が、私の二つの目で見すえていると、外面的にも高貴なものになったのだ。そうして私のところに初めて、人間の本来の性質に対する無意識の愛と尊敬とが芽生え、そこから人間のすがたが、私にとって、よろこびや、美しさや、尊さや、力強さや、価値などの、一種の指針のようなものとなった。

と断言するに至るのである。そして詩人はこのように “That Men did at the first present themselves/Before my untaught eyes thus purified,/Remov'd, and at a distance that was fit.”²⁰⁾ (人間というもの、最初から、私の未熟な目のまえに、これほどまでに純化して、しかも、適度に、つかず離れずの距離において、提出してくれた) ことに対し、自然と人間を司る神に対し、感謝をしなければならないと、喜びを示すのである。

ほんの幼い少年の頃、だれでもが似たような記憶を持つのだが、家から特にたいした目的もなく、遠くへ迷い出してしまうことがある。山や谷に囲まれた自然の中で育った詩人は、そうした子供らしい冒険に似た散策の途上で、奥深い谷間にふと足を進めていった時、霧を通して、頭上高く、ぬっと現われたあの羊飼いとの出会いを一つの原点として（そしてなによりも重大なのは、そうした羊飼いにに対し、驚きうるだけの眼差しをもっていた詩人の目と心なのだが）、その後折あるごとに、人間に対する思いをふくらませつづけていった。羊飼いに課せられた労働は決して易しいものではなかった。時として、少年の目には厳しすぎるほどに映るものだった。それに加え、少年が目にした田園の風俗や習慣は、決して飾りたてるようなことはなく、田園地方らしく素朴であり、贅沢などということとは全く縁遠いものだった。こうした環境が、詩人の人間に対するイメージ形成に少なからず影響を及ぼしたのは当然のことであった。「危険や、悲しみ、苦しみといったイメージを伴い、苦悩する人間」の姿が詩人の少年時代の心に強く焼き付けられていったことは、その後の詩人の人間観に消えない痕跡となって留まり、折あるごとに頭をもたげることになった。

Book VIIIも終りに近づいた ll. 842—3 では、“In the tender scenes/Chiefly was my delight”（心の温まる情景をとくに私は好んだ）と静かに深くなった心の成長を吐露する詩人は、Book IXにおいて、

born in a poor District, and which yet
Retaineth more of ancient homeliness,
Manners erect, and frank simplicity,
Than any other nook of English Land,
It was my fortune scarcely to have seen
Through the whole tenor of my School-day
time
The face of one, who, whether Boy or Man,
Was vested with attention or respect
Through claims of wealth or blood; nor was
it least
Of many debts which afterwards I owed
To Cambridge, and an academic life
That something there was holden up to view
Of a Republic, where all stood thus far
Upon equal ground, that they were brothers all
In honour, as in one community,
Scholars and Gentlemen, where, furthermore,
Distinction lay open to all that came,
And wealth and titles were in less esteem
Than talents and successful industry.²¹⁾

私は貧しい地方に生まれ、しかしその地方には、イギリスのどんな片田舎よりも、さらに、

あの古い昔からの人々の心の慎みぶかさ、きりっとした物腰、つつみかくさぬ素直さなどが、十分のこされていたので、田舎での学校生活全体を通じて、子供であろうと、大人であろうと、金持ちであるからとか、血筋が良いからといって、ひとの注目をひき、尊敬をうけるような人間には、ついでにお目にかかったことがなかったのは、たしかに私の幸運でもあった。次いで、ケンブリッジに行っても、そこにはいかにも共和国らしい特質が、はっきり打ち出されていて、そのことは私があの大学生活に負うている数々の恩恵のうちでも、決して意味の少ないものではなかった。ここでは全部の学生が、すべて平等の地位にあり、そのため特待生も裕福な自費生もまるでひとつの共同体の中にいるように互いに信頼しあう兄弟であった。さらに良いことには、ここにおいては、入学してくるすべての学生は、頭角をあらわすことは自由にできなし、財産も身分も、ここでは、持って生まれた才能や勤勉に努力してえられた栄冠に較べれば、問題ならなかった。

と述懐するのである。こうしてワーズワースは少年の頃より、幸運に支えられ、ほとんど無意識のうちに、²²⁾ ワーズワース独自の人間観を形成、深化させていったのである。

Ⅲ

「自然への愛から人間への愛」をも感得するに至った詩人は、人間としての道義感から “the government of equal rights/And individual worth”²³⁾（平等の権利と個人の価値とを重んじる政治）に対して当然のように賛意を示し、フランス革命に感激し、自由・平等・博愛のために戦うことになるのだが、革命という、正に人間その事の問題に関し、計らずも、“Sick, wearied out with contrarities/Yielded up moral questions in despair”²⁴⁾（矛盾撞着に苦悩し、疲れ果て、絶望のうちに、道徳の問題を放棄してしまった）という結末を背負うことになってしまった。

Coleridge との共同によって1798年世に問われた “Lyrical Ballads” は、French Revolution 以後の絶望と孤独と放浪の精神的危機を経緯し、回復した、ワーズワースの “the still, sad music of humanity”²⁵⁾（人

間の静かな、悲しい音楽)を基底にした詩集となった。そこでは“Preface” to “Lyrical Ballads”に示されているように、“common life”(平凡な生活)から, “as far as was possible, in a selection of language really used by men”(できうるかぎり, 人間によって実際に用いられている言葉を精選し), “low and rustic life was generally chosen”²⁶⁾ (一般に卑しい田舎の生活が選ばれ), 幼・少年時代, そして青年時代を通じて, 培われ育まれてきたワーズワースの人間への姿勢が, 弱い者や裏切られた者に対する深い同情, 世界から見捨て去られた老人, 無垢である子供達, そして耐え続けている者達のいくつもの姿を通して, 並々ならぬ思いを込めてうたいあげられている。

まず1795年に書かれ, 1798年の“Lyrical Ballads”に収められた“Lines left upon a seat in a Yew-tree”には, ワーズワースの生命あるものに対する凜とした愛が示されている。いちいの木の木陰に憩う旅人に向けて, “If Thou be one whose heart the holy forms / Of young imagination have kept pure,” (もし君の心が, 青年の想像力が描く神聖な姿によって, まだ純粋さを失わないでいるならば)

he who feels contempt
For any living thing, hath faculties
Which he has never used; that thought with
him
Is in its infancy. The man whose eye
Is ever on himself doth look on one,
The least of Nature's works, one who might
move
The wise man to that scorn which wisdom
holds
Unlawful, ever.²⁷⁾

生命あるどんなものにもでも侮蔑を感じずる人は、
まだ一度も使ったことのない機能を持っていること、
その人の思想はいまだに幼年期を脱けていないのだ
ということ。

いつも自分自身をのみ見ている人は、
自然の作ったものの中でも最も小さい人、
賢明な人を、叡知が常に不法と見なす、
あの軽蔑に追いやる人なのだ。

ということを知りなさいと、生命あるものを侮蔑してはいけない、生命あるものを尊び慈しまねばならないという戒めが語られている。

“The Mad Mother”では、夫に見捨てられた女の悲しみとその子に寄せる母としての愛がうたわれる。女は

その悲しみのために、人目には気が狂ってしまったと見えるほどであるが、やがていつまでもただ悲しみに打ち沈んでばかりはいられないことに気づく。“To thee I know too much I owe”²⁸⁾ (坊やがどんなに私のためになっているか私にはよくわかっている。) “Oh joy for me that sight to see!”²⁹⁾ (坊やを見るのがうれしくてうれしくて。) だから、さあ

Suck, little Babe, oh suck again!
It cools my blood; it cools my brain;
Thy lips I feel them, Baby! they
Draw from my heart the pain away.
Oh! press me with thy little hand;
It loosens something at my chest;³⁰⁾

お乳をおのみ、坊や、もっとお飲み。
それは私の血をさまし、頭をさましてくれる。
坊やの唇がさわると、その唇が
胸のいたみを吸い出してくれる。
おう、その小さな手で押して頂戴。
それが胸のつかえをかるくしてくれる。

“Thou art thy Mother's only joy”³¹⁾ (坊やはお母さんの唯一つのよろこび。) だから “for thee / Bold as a lion I will be; / And I will always be thy guide, / Through hollow snows and rivers wide.”³²⁾ (私は坊やのため、獅子のように大胆になろう。雪の野や広い河をわたって いつも坊やの道しるべになろう。) だから

Dread not their taunts, my little life!
I am thy Father's wedded Wife;
And underneath the spreading tree
We two will live in honesty.
If his sweet Boy he could forsake,
With me he never would have stayed:
From him no harm my Babe can take,
But he, poor Man! is wretched made,
And every day we two will pray
For him that's gone and far away.³³⁾

ひとのあざけりを、坊や、恐れることはない。
私は坊やのお父さんの正規の妻。
枝をひろげた樹の下で
二人でまっとうな暮しを立てて行こう。
わが子を棄ててかえりみない父親が
私と一緒にくらせる筈がない。
この子が迷惑をうけるおそれはなくなったが、
あの人も気の毒な性根の人。
毎日二人でお祈りをささげよう
遠くへ去ったあの人のために。

夫に見捨てられた悲しみを越えて、母と子はその絆をそれだけ一層強く確めて、末長く生きていこうと結ぶ。このように悲しさを耐えて、“We two will live in honesty” といった態度で、生きぬこうとする姿は、ワーズワースの人間観の一つの特質である。

“The Complaint of a Forsaken Indian Woman” は “Lyrical Ballads” の第二版に収められた作品である。旅の途中で、病気になってしまったインディアンの女性が、仲間と一緒に旅をつづけることができなくなってしまい、とうとう置き去りにされたあと、もう明日にも差し迫ってきた死を予感しながら、不安にかられ、独り夜の暗の中に横たわっている時、自分から引き離されていったしまった幼い子供に対する、断ち切り難い情愛が、独白の形を取りながら、彼女の心に尾を引くように沸き上がってくる様がうたわれている。

母と子の愛情を、しかも見捨て去られた母親の子に対する愛情をうたうことは、ワーズワースにとっては避けて通れない大切なテーマであった。“The Thorn” に見られるように、二十二年前、結婚を約束し、その式の日取りまで決め、そしてなによりもお腹には尊ぶべき新しい命が身籠られていたにもかかわらず、やがては夫たるべき Stephen Hill の裏切りにあった Martha Ray は、彼が他の女性と結婚したその日以来発狂した。そしてその六ヶ月後から、とある山頂の “not higher than a two-year's child”³⁴⁾ (高さは二才の幼児にもおよばない)、“this aged thorn”³⁵⁾ (この年老いた茨の木) のある塚 (“This heap of earth...../Is like an infant's grave in size.”)³⁶⁾ に、二十二年たった今もなお、夜といわず昼といわず、足を運び続ける Martha Ray の姿は、ワーズワースにとってはやはり重要な人間像であった。「一枚の葉も一本のとげも持たず、力を合わせて地面に引きずり倒そうとする苔に耐えながら、じっと石のように立っている年老いた茨はそういう彼女の姿を象徴するものであったろう」³⁷⁾ とは至言である。

“We are Seven” では、八つになるかわいい田舎娘 (a little cottage Girl) が、Goodrich Castle のあたりで詩人に会い、兄弟は何人いるのと問われて、皆んなで七人と答える。それで皆さんどちらにいらっしゃるのと、さらに問われて、二人は Conway に、それから二人は船乗り、そして “Two of us in the church-yard lie”³⁸⁾ (あとの二人はお墓でねているの) と答える。常識という物指で判断することを身につけてしまった大人は、“If two are in the church-yard laid,/Then you are only five.”³⁹⁾ (もし二人がお墓にねむっているのなら あなたたちは五人だけでしょ) と正そうとする。

‘Their graves are green, they may be seen,’
The little Maid replied,
‘Twelve steps or more from my mother's door,
And they are side by side.

‘My stockings there I often knit,
My kerchief there I hem;
And there upon the ground I sit,
And sing a song to them.

‘And often after sun-set, Sir,
When it is light and fair,
I take my little porringer,
And eat my supper there.’⁴⁰⁾

「二人のお墓は緑色よ、ちゃんと見えてるわ。」
その子は答えるのでした。
「お母さんのすまいから十二歩ほどのところにならんでねているの。」

わたしそこでよく靴下を編んだり
ハンカチのふちどりをしたりするの。
そして地面にすわって
二人に歌をきかしてあげるの。

日が暮れても
そとがまだ明るくってきれいだと
私よくお粥碗をもち出して
そこでお夕飯をたべるの。

とゆずらない。ここには人間への優しい一体感が何度も何度もかわいい田舎娘によって繰り返される。II. 1-4 の “A simple child, dear brother Jim,/That lightly draws its breath,/And feels its life in every limb,/What should it know of death?” (のびのびと息づき、手足の隅々に生気のみなざる 無邪気な子供 子供に死などどうしてわかれよう。) という first stanza には、幼い日のワーズワースの人間認識 (“Nothing wae more difficult for me in childhood than to admit the notion of death as a state applicable to my own being.”)⁴¹⁾ が投影されているように思われる。

子供と同様に、“meddling intellect”⁴²⁾ に misshape されることのない “The Idiot Boy” (白痴の少年) を扱うことによって、かけられた期待にも答えられず、フクロウとニワトリ、月と太陽の区別さえつけられなくて、“The cocks did crow to-whoo, to-whoo,/And the Sun did shine so cold.”⁴³⁾ (ニワトリたちがトッファー、トッファーとないていたよ。そしてお日さまがとってもつめたく光っていたよ。) と答える白痴の少年の、日常性を越えた人間の姿に対しても、さらに言えば人間だけにとどまらない、むしろ生命あるものすべてに対してとさ

え思われる、詩人の優しい、慈しみの眼差しが感じられる。作品の中で moon, moonlight が多用されているが (moon 11回, moonlight 8回), title の “The Idiot Boy” となにか符合するものがあるように思われる。ワーズワース自身の

almost extempore; not a word, I believe,
being corrected, though one stanza was
omitted. I mention this in gratitude to
those happy moments, for, in truth, I never
wrote anything with so much glee.⁴⁴⁾

という作品に付けられた note を読む時、詩人にとって、こうした題材に対する無理のなさが何われ、作品に表われた人間への我々の密着感を増してくれる。

人間への大きな、包み込むような眼差しは、ワーズワースが人間を考える際の欠かせない対象であった、老人の姿にも見受けられる。“Animal Tranquillity and Decay” は、当初は “If I recollect right these verses were an overflowing from The Old Cumberland Beggar”⁴⁵⁾ ということであった。しかし結局は独立した一篇となり、“Lyrical Ballads” に入れられ、今日では “Poems Referring to the Period Old Age” の中に収められている。

冒頭の二行で “The litte hedge-row birds/That peck along the road, regard him not.” (往来に餌をあさる垣根の小鳥も彼を無視している。)と表現されていることからわかるように、まさに自然そのものの一部となってしまうて生きている老人が、decay していく悲しみを越えて、次のようにうたわれる。

He travels on, and in his face, his step,
His gait, is one expression: every limb,
His look and bending figure, all bespeak
A man who does not move with pain, but
moves
With thought.—He is insensibly subdued
To settled quiet: he is one by whom
All effort seems forgotten; one to whom
Long patience hath such mild composure given,
That patience now doth seem a thing of which
He hath no need. He is by nature led
To peace so perfect that the young behold
With envy, what the Old Man hardly feels.⁴⁶⁾

彼はあゆみつづけるが、顔と、足どりと
身のこなしに見られる表情は同じだ。
手足も、目付きも、かがんだ姿勢も
すべてが、苦痛を覚えないで、何かを思いつめなが
ら動く人を語っている。

彼は無意識に自分を仰えて
落ち着いた、静かなものごしになっている。
彼は一切の努力を忘れ去った人のよう
久しきにわたる忍耐が穏やかな落着きを生み出し
そのために忍耐も今や必要でなくなった人のように
見える。
彼は自然の導きでまったき平和に達し
そのため、若者らは羨望のまなこで
当の老人が殆んど気付かないものを見るのだ。

“A man who does not move with pain, but moves /With thought” という行には、物に動じさせられることのない、静かな強さが地についている。「久しきにわたる忍耐が穏やかな落着きを生み出し、そのために忍耐も今や必要でなくなった人のように見える。」そして「若者らは羨望のまなこで、当の老人が殆んど気付かないものを見るのだ。」この老人のもつ静けさの背後に潜む衰えを、決して悲観するだけではなく、むしろその姿に至るまでの久しきにわたる忍耐を背負い通したこの老人への、静かな肯定が感じとられてくる。十四行の詩行の中に、二度までも patience という言葉が用いられていることにも注目したい。

老人を通しての人間への思いは、“Lyrical Ballads” 以後に書かれた “Resolution and Independence” (Composed 1802) ではさらに顕著に示される。この詩に関し、ワーズワースが I. Fenwick に語った所によると、ここに登場する老人 (Leech-gatherer) は実在した人であったことがわかる。“This old man I met a few hundred yards from my cottage at Town-End, Grasmere; and the account of him is taken from his own mouth.”⁴⁷⁾ そしてその間の事情については “Journals of Dorothy Wordsworth” にさらに詳しく記述されている。⁴⁸⁾

この詩はその内容の持つ重さに比較し、極めて簡潔な表現で綴られていることがまず強く心に残る。「吼えかけるような風、滝のような大雨」の一夜が明けて、人も自然も晴朗きの序曲を呼吸しているような朝である。

There was a roaring in the wind all night;
The rain came heavily and fell in floods;
But now the sun is rising calm and bright;
The birds are singing in the distant woods;
Over his own sweet voice the Stock-dove
broods;
The Jay makes answer as the Magpie chatters;
And all the air is filled with pleasant noise
of waters.
All things that love the sun are out of doors;
The sky rejoices in the morning's birth;⁴⁹⁾

風が終夜吼えたけり
大雨が滝のように降りそそいだ。
しかしいま日は静かに、明るく昇っている。
遠くの森で鳥がさえずっている。
野鳩は自分のぼれぼれする声に耳をすまし
鵲がおしゃべりをし、かけすが答えている。
そして大気はこころよい水音に充ちている。

陽光を愛するものはみな戸外に出ている。
空は朝の誕生を喜んでいる。

「そのとき私は沼地を旅していた。」⁵⁰⁾ 輝くような自然の中を、心満ちたりて独りさまよい歩くことは、「序曲」にもよくみられるように、ワーズワースにとっては、詩的創造へのかけがえのない体験であった。⁵¹⁾ “The pleasant season did my heart employ: / My old remembrance went from me wholly; / And all the ways of men, so vain and melancholy.”⁵²⁾ (このころよい季節が私の心をみたした。空しい、憂鬱な、人の世のあらゆる営みとともに 古い思い出は完全に忘れ去られた。) 幸いであった。至福への最中にあった。しかしこの時詩人は、実在の奥底にいつも必ず潜んでいた陰の部分への果てしない不安をふと予感し、意識をもつ者として、とめどない寂しさに沈むのだった。

But, as it sometimes chanceth, from the might
Of joy in minds that can no futher go,
As high as we have mounted in delight
In our dejection do we sink as low;
To me that morning did it happen so;
And fears and fancies thick upon me came;
Dim sadness—and blind thoughts, I knew
not, nor could name.⁵³⁾

しかし、よくあることだが
登りつめた極度の喜びから
喜びの達した高さだけ、それだけ深く
落胆の底に沈むことがある。
その朝の私がそれであった。
恐れ、妄想、漠たる悲哀、言い知れぬ盲目の思いが
ひしひしと私に押し寄せて来た。

「孤独と、心痛と、苦難と、貧困の、また別の日が訪れるかも知れ」⁵⁴⁾ ないと、詩人は心を重く塞ぐのだった。そんな重い気持ちで、沼地の旅を続けていた、そんな折に、「それは格別の恩寵によるのか」それとも「天の導き」によるのか、いずれにせよ「この淋しい場所でこのようないやな考えと闘っていたとき」⁵⁵⁾

Beside a pool bare to the eye of heaven
I saw a Man before me unawares:
The oldest man he seemed that ever wore
grey hairs.⁵⁶⁾

not all alive nor dead,
Nor all asleep—in his extreme old age:
His body was bent double, feet and head
Coming together in life's pilgrimage;
As if some dire constraint of pain, or rage
Of sickness felt by him in times long past,
A more than human weight upon his frame
had cast.⁵⁷⁾

しんとして日を浴びているあの池のほとりで
ふと目のまえに一人の男を見た。
それは白髪、途方もなく年老いた人のように見え
た。

あまりに年老いて
生きているとも死んでいるとも眠ることもつかず。
彼のからだは二重にまがり、足と頭は
長い遍歴の末に相合おうとしていた。
あたかも、苦痛のおそろしい重圧か
遠い昔にうけた病気の猛威が
人間に堪え得ない重みを彼の体躯に加えたかのよう
に。

「やがて老人は身を動かして 杖で池をかき廻した。そして泥水を まるで書物でも読むように つくづくと見つめた。」⁵⁸⁾ その時、私はその老人のかたわらに歩み寄って、「一体どんな仕事をしておいでです。貴方には淋しすぎる場所のようだが。」⁵⁹⁾ と問うた。すると

His words came feebly, from a feeble chest,
But each in solemn order followed each,
With something of a lofty utterance drest—
Choice word and measured phrase, above the
reach
Of ordinary men; a stately speech;
Such as grave Livers do in Scotland use,
Religious men, who gives to God and man
their dues.

He told, that to these waters he had come
To gather leeches, being old and poor:
Employment hazardous and wearisome!
And he had many hardships to endure:
From pond to pond he roamed, from moor to
moor;
Housing, with God's good help, by choice or
chance;
And in this way he gained an honest maintenance.⁶⁰⁾

言葉は貧弱な胸から弱々しくもれて出た。
しかしどこか気高い声音によそわれて
一言一言が荘重なつながりでつづき
常人の及ばぬ洗練された語句と
節度ある言いまわしだった。堂々たる言葉だ。
神と人にまことをつくす信仰の人
スコットランドの厳かな民の用いるような言葉だった。

彼は言った、年老いて貧しいので
蛭を取るため、この池に来たのです。
危険で根気のいる仕事だった。
彼はさまざまの困難を忍ばねばならなかった。
神の恵みで、その時まかせに宿をとりながら
池から池、沼から沼へ、彼はさまよい歩いた。
こうして彼は正直一途の暮らしをつづけて来た。

この老人が傍に立って語り続けているうちに、「その声は私に殆んど聞きとれない 流れの音のようになり、一語一語のけじめもつかなくなった。」⁶¹⁾ そして「命も縮む恐れ、叶いそうもない望み 寒さ、苦痛、労苦、その他あらゆる肉体の苦しみ、みじめな死をとげた偉大な詩人達」⁶²⁾のことがこの老人と二重合わせになるようにして自分の心を刺してきた。「私の内心の眼 “my mind's eye” に彼がしょっちゅう 退屈な沼のあたりを 黙々とひとり歩いている姿が浮んできた。」⁶³⁾ やがてこの老人の

when he ended,
I could have laughed myself to scorn to find
In that decrepit Man so firm a mind.
“God,” said I, “be my help and stay secure;
I'll think of the Leech-gatherer on the lonely
moor!”⁶⁴⁾

話が終ると
弱々しい老人にこの不拔の心を見出して
私は自分を笑いたい気になった。
「神よ、しっかり私の支えになって下さい。
私は淋しい沼地の蛭取りを思い出しましょう。」

詩人は ‘this Providential figure has been “sent” to give me human strength by “apt admonishment.” ’⁶⁵⁾ として謙虚にこの Leech-gatherer をわが諫めとするのだった。

私は「楽しい思いで生涯を過ごしてきた」⁶⁶⁾のに、いやそうだからこそというべきなのか、逆に「空しい、憂鬱な、人の世のあらゆる営みとともに、古い思い出は完全に忘れ」去られ、「こころよい季節が私の心を」みたくしてくれているその最中に、どこから疼いてくるのか、し

かし確実に、ある「恐れ、妄想、漠たる悲哀」を伴って「言い知れない盲目の思いが」意識の深みから、ひしひしと押し寄せてくる。こうした不安な思いは止まる所を知らず、やがて自分には、また別の「孤独と、心痛と、苦難と貧困」の日が襲ってくるのではないかと、心を痛め、重く身構えざるを得なくなる。ところが一方では、からだか「二重にまがり、足と頭は長い遍歴の末に相合おう」とさえしている程に、耐え働き続けてきた生涯で、やっと恵まれてもうけた十人の子供も、そのうち九人までもをすでに失い、残る一人は船乗りとなって旅に出たが、その後どのようになったものか定かでない。⁶⁷⁾ 子に先立たれた親の悲しみは深いという。この蛭取りの老人の悲しみはどれほどであったろうか。それを、泣いたり、叫んだり、自失したりしているのではないのである。否、そうではないからこそ、「むき出しの山巔に 巨大な石がうずくまって どのようにして、どこからそこに来たかと 見る者のすべてに不審をいだかれることがある。それは五官を具えたもののように見えるのだ 日を浴びるため、のこのこ這いだして 張り出た岩や砂の上に休んでいる海獣のように。」⁶⁸⁾ そのようにこの蛭取りの老人は見えたのである。この巨大な石への実在の不可解さは、この石に譬えられるこの老人の辿ってきた、一つの生命の背負った多難な宿命の不可思議さと overlap しあうものがあるように思えてくる。

どのような仕事をしているのかと問われたこの老人は、銜うことなく、「年老いて貧しいので 蛭を取るため、この池に来たのです」と答え、さらに「もとはどこでも見つかったものですが 長い間においおい少なくなって来ました。でもあきらめず、捜しあるいてとっているのです」⁶⁹⁾と答える。その仕事は「危険で根気がいり

さまざまな困難を忍ばねばならなかった」が、この老人は「正直一途な暮らし」だけは守り続けてきたのだ。冒頭の “There was a roaring in the wind all night; / The rain came heavily and fell in floods;” のあとに訪れた “now the sun is rising calm and bright;” とうたわれる晴朗さは、そうした中を幸福に満ち満ちて旅をしながら、やがては不安に沈んでいった彼のものではなくて、むしろ幾多の苦しみを耐え凌いできた後の、この清朗な老人を象徴するものであったように思えてくる。

私にはこの老人は、「適切ないましめの言葉で私を力づけるため どこか遠いところからよこされた人のように」⁷⁰⁾ 思えてきた。この老人が話し終った時には、この蛭を取る老人に、不動の resolution と independence の気概が凜として感じ取られ、こんなにも老い衰えた老

人に、こんなにもしっかりとした堅忍不拔の心のあることを見出したのだった。彼は “God” said I, “be my help and stay secure; / I’ll think of the Leech-gatherer on the lonely moor!” と心を諫めるのだった。この老人に、人間の重さ、人間性の尊さを見出したのである。

ドロシー・ワーズワースの1802年5月4日以降の日記を見る時、ワーズワースのこの Leech-gatherer に対する姿勢の並々でなかったことが伝わってくる。

May 4, “I wrote *The Leech Gatherer* for him, which he had begun the night before, and of which he wrote several stanzas in bed this morning.” May 7: “Wm feeling himself strong, fell to work at *The Leech Gatherer*; he wrote hard at it till dinner time, then he gave over, tired to death—he had finished the poem.” May 9: “Wm worked at *The Leech Gatherer*...I was oppressed and sick at heart, for he wearied himself to death.” July 2: “transcribed the alterations in *The Leech Gatherer*.” July 4. “Wm finished *The Leech Gatherer* today.”⁷¹⁾

「人間の外面が、どれほどその見せかけでは粗野であっても、そのところの中では、どれほどしばしば、敬虔な祈りがなされていることだろうか。」彼はそういうことを「将来の私の詩の主題」にしたいと考えた。そのためには「大胆に実質的な事柄」を扱って、そうしたことを語りたい。そして出来ることなら、そうしたことを「教え、鼓吹し、不純なもののない純真な耳を通して注ぎこみたいのだ、歓喜とやさしさと希望とを。」⁷²⁾と「序曲」の第十二巻で人間への愛の構想をうたい明したワーズワースは、質朴で贅沢などとは縁遠く、自然の力を感じながら、懸命に生き働き耐える羊飼いとの出会いを契機にして、「苦悩する人間」を通じ、人間への関心の深化、人間性の崇高化を経て、しっかりと人間への愛を自分自身のものとした。そしてケンブリッジ大学で学ぶ機会を得たという点にだけ限ってみても、まさに選ばれた人であったワーズワースが、英雄や偉人の姿をうたったのではなく、夫に見捨てられた女や、見捨て去られその上に子供からも引き離されてしまい独り迫ってくる死を予感しながら耐えている女や、婚約者に裏切られた女の執着等に深い同情を示し、無垢な子供達に温かい、時には羨望の眼差しを向け、世界から見捨て去られ独り生きる老人や、本論では扱うことができなかった羊

飼いの “Michael” 等にもられるような、極めて庶民的な人間が、それぞれの悲しみを背負い、苦悩の中で挫けそうになるのを堪え、悲しみが深ければ深いほど、苦悩が重ければ重いほど、それだけ一層高らかで高潔な信念を求めて、耐え忍んでいこうとする人間らしきのそうした姿を肯定し、讃美し、人間であることの重さ、尊さに向けられた眼差しを、決して逸らしてしまうようなことをしなかった、その humanism は、ワーズワースの詩精神を支える大きな支柱であった。

最後に、こうして辿ってきた人間の姿には、

was the truth received into my heart,
That under heaviest sorrow earth can bring,
Griefs bitterest of ourselves or of our kind,
If from the affliction somewhere do not grow
Honour which could not else have been, a
faith,
An elevation, and a sanctity,
If new strength be not given, or old restored
The blame is ours not Nature’s.⁷³⁾

私のこころのなかに

次のような真実が理解されるようになったのだ。つまり、この地上で、どれほど痛切な悲しみに会い、また、個人的な、あるいは人間全体としての、どんな辛い悲しみに出会っても、そうした苦悩をなめながらも、どこかに、もしもその苦悩がなければ、決して得られなかったような尊厳、ひとつの信念、高らかな心、高潔さが生まれてくるようであれば、もしも、新しい力が与えられ、古い力が回復されるのであれば、それは自然の罪なのではなく、われわれ人間の責任なのだということが。

といった苦悩を通して、より高い人間形成へ向おうとする、ワーズワースの人間への信頼と期待が間違いなくその後楯になっていることを見逃すことはできない。

文 献

- 1) Herbert Read: *Wordsworth*, p. 184, 1949, Faber and Faber.
- 2) *The Prelude* (1805) by E. de Selincourt, XII, 226—239, 1966, Oxford. 以下 *The Prelude* の引用はこの text による。
- 3) 岡三郎訳：「ワーズワース・序曲」, pp. 470—71, 1968, 国文社。尚以下 *The Prelude* の訳詩は、訳詩のみの引用も含めて、岡三郎氏のものによる。
- 4) *The Prelude*, XII, 239—240.
- 5) *Ibid.*, XII, 253—259.

- 6) *Ibid.*, XII, 266—272.
- 7) *Ibid.*, VIII, 69—71.
- 8) *Ibid.*, VIII, 74—81.
- 9) William Wordsworth: *The Prelude*, ed., by E. de Selincourt, p. 570, 1959, Oxford.
- 10) *The Prelude*, VIII, 92—95.
- 11) *Ibid.*, VIII, 101—106.
- 12) *Ibid.*, VIII, 355—359.
- 13) *Ibid.*, VIII, 178—182.
- 14) *Ibid.*, VIII, 183—191.
- 15) *Ibid.*, VIII, 205—209.
- 16) *Ibid.*, VIII, 211—213.
- 17) *Ibid.*, VIII, 390—396.
- 18) William Wordsworth: *The Prelude*, ed., by E. de Selincourt, 1959, Oxford, の p. 580 に D. W.'s letter to Crabb Robinson, December 21, 1822, 'My Br. is very sorry that you should have missed the Chartreuse. I do not think that any one spot which he visited during his youthful Travels with Robert Jones made so great an impression on his mind: and in my young days he used to talk so much of it to me' とある。
- 19) *The Prelude*, VIII, 410—416.
- 20) *Ibid.*, VIII, 438—440.
- 21) *Ibid.*, IX, 217—235.
- 22) William Wordsworth: *The Prelude*, ed., by E. de Selincourt, 1959, Oxford, p. 581 に They give a vivid picture of the occupations of the men and women among whom the poet grew up, and who were unconsciously leading him from love of nature to love of man とある。
- 23) *The Prelude*, IX, 247—248.
- 24) *Ibid.*, X, 900—901.
- 25) *Tintern Abbey*, 91.
- 26) Coleridge and Wordsworth: *The Lyrical Ballads* 1798—1805, pp. 8—9, 1965, Methuen.
- 27) *Lines left upon a seat in a Yew-tree*, 52—59. 尚訳詩は 金田真澄:「ワーズワースの詩の変遷」, p. 121, 1972, 北星堂による。
- 28) *The Mad Mother*, 19. 尚以下の *The Prelude* 以外の訳詩は、特別の明記がないかぎり、前川俊一訳:「ワーズワース詩集」, 1972, 弥生書店による。
- 29) *Ibid.*, 29.
- 30) *Ibid.*, 31—36.
- 31) *Ibid.*, 42.
- 32) *Ibid.*, 51—54.
- 33) *Ibid.*, 71—80.
- 34) *The Thorn*, 5.
- 35) *Ibid.*, 6.
- 36) *Ibid.*, 5—8.
- 37) 金田真澄:「ワーズワースの詩の変遷」, p. 153, 1973, 北星堂。
- 38) *We are Seven*, 21.
- 39) *Ibid.*, 35—36.
- 40) *Ibid.*, 37—48.
- 41) *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed., by E. de Selincourt and Helen Darbishire, Vol. IV, p. 463, 1968, Oxford.
- 42) *The Tables Turned*, 26.
- 43) *The Idiot Boy*, 460—461.
- 44) *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed., by E. de Selincourt and Helen Darbishire, Vol. II, p. 478, 1968, Oxford.
- 45) *Ibid.*, Vol. IV, pp. 447—448.
- 46) *Animal Tranquillity and Decay*, 3—14.
- 47) *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed., by E. de Selincourt and Helen Darbishire, Vol. II, p. 510, 1968, Oxford.
- 48) *Journals of Dorothy Wordsworth*, ed., by E. de Selincourt, Vol. I, p. 63, 1959, Macmillan.
- 49) *Resolution and Independence*, 1—9.
- 50) *Ibid.*, 15,
- 51) Richard J. Onorato: *The Character of the Poet*, p. 239, 1971, Princeton.
- 52) *Resolution and Independence*, 15……19—21.
- 53) *Ibid.*, 22—28.
- 54) *Ibid.*, 34—35.
- 55) *Ibid.*, 50—54.
- 56) *Ibid.*, 54—56.
- 57) *Ibid.*, 64—70.
- 58) *Ibid.*, 78—81.
- 59) *Ibid.*, 88—89.
- 60) *Ibid.*, 92—105.
- 61) *Ibid.*, 106—108.
- 62) *Ibid.*, 113—116. 尚この詩人達については、Mary Moorman: *William Wordsworth, The Early Years 1770—1803*, 1965, Oxford, p. 539 に記述がある。
- 63) *Ibid.*, 129—131.
- 64) *Ibid.*, 136—140.
- 65) Richard J. Onorato: *The Character of the Poet*, p. 258, 1971, Princeton. 尚原文は give him である。
- 66) *Resolution and Independence*, 36.
- 67) *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed., by E. de Selincourt and Helen Darbishire, Vol. II, p. 511, 1968, Oxford.
- 68) *Resolution and Independence*, 57—63.
- 69) *Ibid.*, 124—126.
- 70) *Ibid.*, 111—112.
- 71) *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed., by E. de Selincourt and Helen Darbishire, Vol. II, p. 510, 1968, Oxford.
- 72) 本論の I 参照。
- 73) *The Prelude*, X, 423—430.